十八世紀のカルティエ・ラタンと哲学者エルヴェシウスの学生時代〈下の一〉

――評伝　エルヴェシウス家の人々〈その九〉――

永冶日出雄

第四節　コレージュ・ルイ・ルグランの教育と哲学者エルヴェシウスの学生時代（その二）

―管理機構と教官陣容―

（一）

イエズス会が世界各地で急速に浸透した要因は、なによりも鮮明な布教の理念と強力な組織的活動にあった。ローマ教皇と教団総長の統率のもとに地域毎に管区長が任命され、本部から定期的に巡察官も派遣される。創立者イグナティウスによって起草され、一五五八年に公刊された『憲章と宣言』は教団の基本的な性格を明示したものであり、

イエズス会士の伝道事業や教育活動の源流をなしている。[1] この文書ではカトリック勢力の威信回復をめざして、絶対的な権力と階層的な秩序の確立がつぎのように提起されていた。

本教団は終身の総長によって統治される。

総長は教団総会において指名され、その際辞退はできない。

総長の住居はカトリッと修道会の本拠であるローマに置く。

総長が権限を行使するにあたっては、適切な方途によって各地の管区長や幹部層と連携を保つ。総長は修道院、コレージュ、修練所の地位や職務について三年毎に任免を行う。適切と判断した場合には三年以上に及んでもよい。

巡察官、検視官、管区長、幹部層に自己の権限を代行させたのち、総長は彼らの成果に是非の裁断をくだす。

［中略］

総長のもとへは三年毎に各管区から活動一覧が送付される。この一覧にはすべての団員の年齢、力量の程度、先天的または後天的な才能、徳操や学問における進歩の度合が記入される。

あたかも総長がその場で判断できるように、管区長からの交信は努めて活発に行うように。各地の幹部はそれぞれの施設の状況を毎週管区長へ報告し、管区長は三ヶ月毎にそれを総長へ報告してほしい。[2]

十六世紀のイエズス会は現在のフランス領土に相当するゴール地域を五つの管区に分割し、総長は三年毎に管区長を選出した。フランス（パリ）、アキテーヌ、ラングドック（トゥールーズ）、シャンパーニュ、リヨンがそれであり、リヨン管区は一五八一年にフランス管区から分離した。四二名を記載した当時の管区長一覧によれば、ほとんどの場合フランス人が選抜され、年齢の幅は三四歳から八四歳までであり、その平均は五七歳である。コレージュ・ド・

クレルモン［ルイ・ルグラン］はフランス管区のなかでもっとも早く創立され、管区長のうち少なくとも十四名が同校校長の経歴を有していた。ローマで統率にあたる総長は管区の最高責任者にイエズス会教育の監督を命ずるとともに、直属の巡察官を各地のコレージュに派遣した。[3] デュポン・フェリエ著『コレージュ・ド・クレルモンからリセ・ルイ・ルグランへ（一五六三―一九二〇）―三百年にわたるパリのあるコレージュの日常生活』は、こうしたイエズス会の教育政策についても綿密な解明と深い洞察を示している。

教団の総長はローマとパリの連絡をつねに保持し、彼の使者が万事を漏らさず報告した。コレージュ・ド・クレルモン［ルイ・ルグラン］の実情を総長は自身の眼で把握し、細部に至るまで解明した。彼の権限は『憲章』の含蓄ある条文を改変するのではなく、解釈するところにあった。あらゆる権威の源が『憲章』と総長に存したわけである。彼の傍らにはひとりの総長顧問と四名の参事団が控えていた。これらの参事には各々の管轄として、イエズス会のコレージュを有する地域の四分の一が割り当てられた。［中略］フランス管区長は毎年コレージュ・ド・クレルモンを視察し、校長、教務監、学寮長、教官、書記、説教師、宣教師を任命した。学級の編成や分割、そこにおける教授綱目と教科書、そしてとりわけ良心問題や教義の本質に触れる神学の授業を、彼は監督した。神学級や哲学級への進級試験も特別の調査を受けた。学問だけでなく、信仰心を大切にするよう要望したのである。休日だけでなく、休暇についても管区長の意向が第一であった。彼は教団総長と直接の連絡を保ち、重要な事柄に関してはその裁断を仰ぎ、コレージュに係わる詳細な報告を定期的に送付した。教官全員の年齢、性向、研鑽についても三年毎に一覧が提出されていた。

巡視官はしばしばコレージュを監察した。管区長が多忙な際に代理として出向する者もあり、総長が必要と感じた際に、管区長の意向に係わらず派遣される者もいた。後者の場合には巡視官の調査によって総長は、当

該のコレージュについてだけでなく、責任者である管区長について詳しい情報を得ることになる。監察に関する任命権は原則として総長に属した。ただし、政治的な理由によって国王が巡視官を忌避する事態も生じた。十六世紀のコレージュ・ド・クレルモンへは初期のイエズス会において顕職を占める人物が監察に来た。一五六二年と一五六八年に訪れたナダール神父はイグナティウスの思想をもっとも忠実に解釈する人とされていた。一五七〇年に派遣されたメリキュリアン神父は十年後総長に就任した。一五七九年に監察したマルドナ神父はその時代におけるもっとも明晰な頭脳の持主であった。そして、一五八七年に担当したロラン・マギオ神父は同校滞在任中に偉大な成果をなし遂げた。

こうした巡視官は彗星のようにコレージュを通り過ぎるのではなく、数週間または数ヶ月そこでの滞在と生活を続けた。関係者との密議を重ねながら、彼らは一切の改革に背を向け、すべてを点検した。精神や良心に係る規範にまで介入したのである。巡視官による監察調書の若干が私たちの手元に遺されている。それらは三つの項目から成り、第一には管区長や校長の見解と疑問が誌されている。つぎの項目ではは総長顧問が解決の方策を示唆している。そして、第三の項目で巡視官の結論が下されるか、総長の裁断が求められた。(4)

こうしたイエズス会の基本的な政策と構造が、傘下の学園内部でも踏襲されたことは勿論である。総長直々のコレジウム・ロマーヌムを範として、コレージュ・ド・クレルモンでも位階的な教官組織が築かれ、校長に構成員の任免権が与えられる。学園において校長は彼は教団総長、フランス管区長、巡察官を天空に仰ぎ、足元には教学監、学寮長、風紀監等の幹部教員を従える。こうして彼らは教官の勤務、授業の内容、生徒の生活についてを逐一指図し、巡察官による調査・点検も厳格に行われた。(5) デュポン・フェリエは、『憲章と宣言』で提唱された教育政策が、学園においていかに貫徹されるかを克明に追っている。

一五六四年から一七六二年に至る歴代校長総覧を作成するよう筆者は試みた。確認できたのは五六名である。ほとんど全員の国籍が判明した。一五六四年より一五七三年までの例外的な二名を除き、すべてフランス人にほかならぬ。エドモンド・ヘイはスコットランド人であり、オル・マナレはベルギー人であった。多くの校長はイール・ド・フランス、ブルターニュ、ノルマンディの出身である。ピカルディ、シャンパーニュ、ブルゴーニュ、アンジュ、メーヌ、トウレーヌ、ベリ、ポワトー、ドフィーヌを故郷とする者も散見する。フランス南部の出身者は稀にしかいない。校長に選出される年齢は平均して六十歳台である。稀有な事例としての五十歳以下または七十歳以上の場合も見出される。前歴としては地方の校長職やパリの副校長職が好条件であり、学寮長や教学監から抜擢された者もいる。巡視官や管区長の職務より横すべりする人事もあった。こうした校長がときには大学で教会法典の博士号を受けたり、パリの教授として重要な地位を与えられた。

コレージュの校長は直接の上司である管区長の推挙に基づき、総長によって任命された。慣行として校長は三年間在任したが、この任期は絶対的なもではなく、学園の必要に応じて柔軟に適用された。筆者が厳密に調べえた四四名のうち、半数の校長は三年ないし三年半その地位にあった。六名は三年以下であり、十六名は四年以上にわたる。五名が五年間、二名が七年間、一名が十二年間校長を勤めた。〔中略〕

校長の権限は現代のリセにおけるよりもはるかに大きかった。教官層を徴募することが彼の責任とされただけでない。教官や職員が重大な過ちを告解した場合、彼らを赦免する権限は校長だけが握っていた。校長は毎週すべての学級を監察した。ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語の進度、神学や哲学の論議、講述と詩文、そして人文的修練すべてを彼は監視する。教室のそとでも武芸道場や学校演劇に容喙した。外出や休暇にも校長の許可が必要とされる。学園の財務も彼の主導に依存した。生徒の入学は校長の指示か委託によって決定され、

退学させる権限も彼の手中にのみある。二ヵ月毎に、ときには一ヵ月毎に校長は教官会議を開催し、一層頻繁に学園の聖職者全員を召集した。規範を肝に銘じ、実際に行うよう校長は各人に求め、みずからも刻苦勉励に勤めた。ほかの教官と同じ服装で身を包み、学園の食堂で質素な食事を摂る。だが、彼が全体の首長であり、全員の信頼に値する事実を、みずからの美徳と範例によって、また管理の才幹や節度ある慈愛によって、だれにも印象づけることが必要なのである。校長室に置かれたひとつの冊子のなかに、すべての巡察官は自身の要望を記入できる。このような監察と処置の帰結、さらには新たな提案の骨子を校長は、管区長には月に一度、総長には年に一度報告した。(6)

(二)

傑出した教師として後生に伝わるシャルル・ポレが、コレージュ・ルイ・ルグランに赴任したのは、異常な寒冷と未曾有の飢饉が始まる一七〇八年である。一六七六年ノルマンディの外科医の家に生まれた彼は、カーンのコレージュ・デュ・モンに入学した。この学園はパリ管区における名門校のひとつであり、難関を突破して一五〇〇人の生徒が参じていた。優秀な成績を収めたポレは教師の勧めもあってイエズス会士となり、十六歳のときから三年間パリに留学する。その後レンヌのコレージュに赴任し、イエズス会の方針に沿ってまず第六学級を担当した。こうしてレンヌで六年間勤務した彼は、ブルターニュの鬱積した空気のなかで、ルイ十四世末期における国運の衰退を嘆いたと言われる。一七〇一年にポレは専門的な学問と聖職者の修行を志してふたたび上京し、コレージュ・ルイ・ルグランで哲学と神学を受講した。五年後に司祭位を取得して、短期間ルアンのコレージュに派遣されたあと、一七〇八年にル

イ・ルグランの教官として修辞学担当を命じられる。[7]

イエズス会の系列のなかでもコレージュ・ルイ・ルグランはいわば特権的な地位にあり、充実した教官陣容によってパリの中等教育界を活気づけていた。ここでは人材不足による外国人教官の採用も十七世紀初頭から稀となり、独自の教員養成や教員研修にも配慮が施される。[8]こうした教官の徴募や構成については、デュポン・フェリエ著『コレージュ・ド・クレルモンからリセ・ルイ・ルグランへ』の論述を参照してみよう。

この学園における教官の人数は生徒数によって当然変化した。十六世紀の末葉には十四名か十五名の教官がいた。十七世紀と十八世紀には二十名あまりと思われる。この時期には過密な学級が分割され、第六学級の下に初歩学級が設けられたからである。教官定員は神学とヘブライで各四名、数学、自然学、哲学で各三名、修辞学で二名、第三学級、第四学級、第五学級、第六学級、第七学級の人文科目で一名ないし二名である。

パリでの重要な職務を充たす人材がイエズス会に不足している時代には、コレージュの教官もフランス人だけではなかった。十六世紀にはスペイン人の神父マルドナ、マリアナ、スアレス、マジョリス、ヴェネガス、イタリア人の神父ダンディディ、カストリ、ヴァレンティニ、そしてスコットランド人の神父ティリウスがいた。一六一八年以降に勤務したジェームズ・ゴルドンはこの学園で教えた最後の外国人神父である。　あまりにも若い年齢で神父が教職に就くことが当時は頻繁に生じた。遅くとも一六一一年から一七六二年までこうした事態は世の非難を浴び続けた。地方のコレージュではとくに酷かったらしい。昨日まで生徒であった若者に授業をさせることもあった。コレージュ・ド・クレルモンの場合は大きな弊害には至らなかった。とはいえ、人文科目がしばしば二十歳、二三歳、二四歳、二五歳の新任教官に委ねられた。こうした事実から文法の教師は一層若年であったと推測できる。教官の年齢幅はスコラ神学が二四歳から三七歳まで、哲学は二六歳から三

一歳まで、修辞学は二七歳から三七歳まで、数学は三十歳から四十歳まで、〈良心問題〉は三五歳から四二歳まで、聖書は四十歳から五十歳までである。

優れた才能が異常な早熟さで現れる事例もあり、ときには管区長の指名によってきわめて若い教師がこの学園へ赴任した。晩熟が望ましい、と規範に定められてはいなかった。教育に対する顕著な才能や関心を示す者が、最初に神父たちの間で選抜された。つぎに校長はもっとも傑出した古参教官に彼らを委ねる。こうして教師養成の学舎が設置され、いわば師範学校の方式が実施された。週三回そこでは専門的な教育技術、すなわち教案、講述、矯正などを習得したのである。〔中略〕新任の教官は大抵第六学級を教え、生徒とともに順次上の学級へ移った。生徒の年齢と学業が進むのに応じて、教官の授業も年毎により高度なものとなる。ポレも同様な経験を積み、彼の生徒はその恩恵に浴した。しかし、日常的な仕事はマンネリ化する危険を孕む。そのため若い教師にはサドレ、サキニ、ポンタヌス、ルブラン、ボニファシスなどの著作が奨められた。コレージュ・ルイ・ルグランのもっとも著名な教官のひとり、ジュバンシ神父も若い同僚のために珠玉のような作品、明快で精密で聡明な考察と有益な助言に充ちた作品を著した。〔中略〕

早々と専門化することがこの時代には回避された。ある教官は数学を教える一方、詩人にもなりえた。ふたつの方程式を解く間に、韻律や格調という詩法を操るわけである。ブージャンは物理学者にして詩人、神学者にしてモラリストかつ歴史家であった。ブリュモアも数学者にしてギリシア学者である。スシエは地質学者、神学者、哲学者、詩人であった。パルディは天文学者、数学者、哲学者。グランダミは天文学者、物理学者、神学者、ビュッフィエには幾何学、歴史学、地理学を等しく教えることが可能であった。ツルヌミーヌ、ジャン・ガルニエ、ジャック・ゴルドン、ジャン・フランソワ、サナドン、ドリシー、ラパン、ラリュ、ザップ、

ラサンテなどは同じように多才である。イタリア・ルネサンスの驚異的な精神、すべてを探り、すべてを知る完璧な頭脳に仲間入りでいると、これらの人たちは信じていた。[9]

これら多彩で有能な教官とともにコレージュ・ルイ・ルグランにはいつも五十人あまりのイエズス会士が神学を聴講し、研鑽に励んでいた。また、しばしば地方の聖職者が研究生の資格で寄寓し、文献の閲読や論稿の執筆を進めた。さらにここではイエズス会の機関誌『メモワール・ド・トレヴー』が発行され、同誌編纂所へ世界各国の学者、文学者、伝道師が来訪した。こうしてルイ・ルグランは中等教育の覇者であるに止まらず、イエズス会の文化的な中核のひとつになっていた。

サン・ジャック街でポレが勤務した時期には、同僚として『メモワール・ド・トレヴー』の主幹トウルヌミーヌ、ホラチウスを翻訳したタルトウノン、日本史とカナダ史に詳しいシャルルヴォワ、ギリシア演劇の流麗な仏訳で知られるブリュモワ、ウエストファリア条約を専門とする法学者ブジュアン、ルイ十三世の治世を研究する歴史家グリッフェが世評を高めていた。レンヌおよびルアンで七年間教職を経験したポレは、パリでは当初から他の一名とともに修辞学級を担当した。修辞学級において彼の同僚であった人物は以下のとおりである。①ガブリエル・ル・ジェー、一七〇八年から一七一一年まで、②ノエル＝エチエンヌ・サナドン、一七一一年から一七一七年まで、③ジャン＝バチスト・デュヴァル、④グリル＝ザビエル・ド・ラサンテ、一七一九年から一七四一年まで。[10] しかし、こうした人材もイエズス会の厳しい管理体制に置かれ、多様な校務に追われていた。ルイ・ルグランにおける教官の勤務条件や精神状態をデュポン・フェリエは描き出す。

教官の職務は荷重であった。一日に毎日四時間から五時間、一週では二五時間あまりに及んだ。

それだけではない。頻繁に告解があり、毎朝ミサもなされた。二〇〇人から三〇〇人の生徒に係わる授業の

準備と宿題の点検に日々追われる。生徒に貸与する書物の整理や図書室の管理がなお加わる。個室で寮生を指導する必要もときに生じたが、教官の時間を奪われぬよう、一五八七年以降は勉学の相談のみ半時間以内に限定された。さらに通学生への指導、彼らの父母や家庭教師との懇談もある。かつまた修辞学や人文科目の教官には毎年または隔年に余分な仕事が課せられ、頑健でない人には過酷な負担となった。すなわち、ラテン語による悲劇、さもなければ喜劇かバレーを創作し、数週間にわたってそうした作品の上演を指導する仕事である。パリの公衆に愛好される弁論や謎解きや対話を、優秀な生徒に書かせたり、学ばせたり、朗唱させる。そして、コレージュへ貴顕が来訪するたびに、韻文や説論を即興的に作らねばならぬ。過重な負担を緩和する祭日、休日、休暇を考慮に入れても、これに耐えうる人間の力能がはたしてあろうかと疑問に思われる。[中略]

多くの教師が乗り上げる暗礁について、ジュバンシ神父はつぎのように指摘した。①怠惰を募らせる投げやりな気持。知識の貯蔵の更新を忘れた教師は、日々に無知となる。僅かな蓄えで多くを教えることが、次第に顕著になっていく。②授業において余分な勉強を盛り込む性向。たとえば、ラテン語やギリシア語の詩歌の学習を犠牲にして、フランス語の格式張った式辞や拙劣な韻文を学ばせる。③子どもと親密になりすぎること。無益な会話によって失われた時間は、二度と帰らない。気晴しを求めるあまり、学ぶのを怠るようになる。④気分の急激な変化。今日は冗談を言って、どんな過ちも赦し、明日には突如峻厳で無慈悲となる。こうした性格の不安定は子どもの精神を錯乱させる。⑤自己の職務に誇りを持たぬ教師は、倦怠と疲労にかならず圧迫される。歳を取り、教職が長期にわたり、扱いにくい子どもや荒々しい生徒を相手にするときは、なおさらそうである。

しかし、教官にとって自戒すべき事柄だけを、ジュバンシ神父は示していない。つぎのような目標を達成し

てほしい、と彼は明示明示する。なによりもまず受講者に対する権威。すなわち、説明するにせよ、問いただすにせよ、弁護するにせよ、相手に傾聴させる技術である。神父の論証によれば、この技術は工夫を凝らすことによってのみ獲得できる。知ることと知らせることは互いに切り離せない。生徒の精神を導くもっとも確実な道程は、心情の道にほかならぬ。尊敬と愛情を生徒から得たいと願うならば、みずからも生徒を尊重することが大切である。愛されるだけで充分かもしれない。だが、畏怖されることなく、愛されようと望むのは、あまりに無分別である。(11)

コレージュ・ルイ・ルグランにポレが勤務したのは一七〇八年から一七四一年の三三年間に及び、若き日の啓蒙思想家ヴォルテール、ディドロ、エルヴェシウス、テュルゴに薫陶を与えた。なかでもポレから深い感化を受けたのは、一七二六年頃入学し、一七三七年に卒業したエルヴェシウスである。一八九九年に出版されたラセルヴィエール著『シャルル・ポレ神父（一六七六―一七四一）―アンシアン・レジムにおけるひとりの教官』は、中等教育界の珠玉であったイエズス会士についてその生涯と業績を綿密に追っている。しばしば参照するデュポン・フェリエの大著がルイ・ルグランに関する包括的・多面的研究であるとすれば、評伝『シャルル・ポレ神父』はひとりの教師に照明を注いだ貴重な教育史とも評価できる。ラセルヴィエールによれば、聖職者の道を選んだ青年ポレは、異境の地に福音を伝えるという壮大な理想を抱いていた。(12) しかし、イエズス会の政策によって彼はコレージュでの任務に献身し、サン・ジャック街の篤実で博愛的な教師として尊敬される。『シャルル・ポレ神父』に含まれる以下の記述は、そうした教育者の生涯や周囲の雰囲気を綿密に描いている。

海外伝道という希望を断念した代わりに、三三年間にわたってポレはすべての才能と心情を生徒に捧げた。親友のひとりブージャン神父はつぎのように伝える。すなわち、他人の模倣に甘んじないポレは、生徒に講ず

るあらゆる題目について毎日長時間黙考し、研究し、工夫した。そして、生徒の最善のものを読み取れるよう、各人の作文を細心の注意をもって検討した。面白くない仕事や不愉快な役目を果たすとき、彼の姿は一層私たちを敬服させた。そうした地味な任務に才能のすべてを献上し、人生のもっとも麗しい時期、輝かしい栄誉と名声を獲得できる時期を犠牲にしたのである、と。

自己の職務に専念したポレは、健全な楽しみからも身を隔てた。ときに非難されるように、この時代のイエズス会士は俗世間、なかでも上流社会と頻繁に接触した。ブフール、ラパン、ラリュはパリの文芸サロンの常連であり、数週間または数ヵ月も貴顕に同行することもあった。謹厳なブルダローヌが総代監バヴィーユの親友であり、ボワローと親密な仲であったのはよく知られている。こうした風潮は宗教生活の観念と相容れぬように思われるが、時代の慣習という解釈が説明にも弁解にもなる。だが、ポレにこの種の弁解は無用であった。国家の枢要な地位にまで昇った教え子が、年取った恩師をサロンや城館に招いても受けつけない。コレージュ・ルイ・ルグランの同僚が交際を求めても、つねに誘いを退けた。古くからの教え子、友人、同輩が神のもとに帰り、平安に死ぬため助けを求めてきたときに、彼は初めて居室を留守にする。また、権力の座にある高官の恩師である彼を、貧者や罪人が頼ってきた場合が同様であった。そうした際にポレは気さくに世話を引き受け、募金を集め、裁判所に陳情し、たじろくところを知らなかった。庇護を求める人たちにみずからの精神的資産を余さず役立てたわけである。[中略]

一七一五年九月一日にルイ十四世が逝去した。コレージュ・ルイ・ルグランの大講堂では、周囲に煌々たる照明が設けられ、暗闇にされた堂内でポレ神父が、追悼演説を朗読した。無数の会衆の最前列にはふたりの枢機卿、三十人の司教、パリ高等法院のほとんど全員、その他多数の宮廷人が座を占めた。十二月十一日にはコ

レージュ・ダルクールの修辞学教官ベニーニュ・グルナンがソルボンヌ教会でルイ十四世を追悼する讃辞をラテン語で捧げた。この集会はパリ大学の主催によって行われ、イエズス会士の宿敵であるノアイエ枢機卿が司会を勤めた。これらふたつは美事な弔辞であって、いずれも異常なまでの評判となった。[13]

（三）

このような学園で若き日を過したエルヴェシウスが、後年カトリック教会とイエズス会を痛烈に批判したことは興味深い。勿論彼の宗教批判はコレージュ・ルイ・ルグランでの勉学や生活からただちに発現したものではなく、徴税総括請負人として地方を巡回した経験、ヴォルテールなど啓蒙思想家の影響、さらには自著『精神論』に対する攻撃と迫害を通して醸成された。本稿での課題はそうした主張の形成過程や論理構造を解明するのではなく、ルイ・ルグランの教育方針とエルヴェシウス後年の思想を対比するところにある。　専制政治への糾弾とともにカトリック教会への非難は、すでに一七五八年刊行の『精神論』のなかで明瞭に述べられているが、一七七二年に出版された遺作『人間論ー人間の精神能力と教育』においてイエズス会に対する指弾がとくに顕著となる。そもそもこの修道会は結成の目的をカトリック勢力の世界的な巻き返しと定め、総長への権力集中によってよって発展した。『人間論』で第一に批判されるのは、イエズス会のいわば政治的側面、政治権力との癒着および内部の管理機構についてである。エルヴェシウスの論述を追ってみよう。

あらゆる修道会のなかでイエズス会はもっとも強大で旗幟鮮明であり、もっとも熱気に溢れている。したがって、狂信主義の想像力をかくも激しく刺激し、王侯の営為かくも易々と侵害できるものはない。総長に対す

る盲目的な服従に貫かれ、イエズス会の全員が互いに信じあっている。こうした体制に疑念を抱かず、彼らは自己の思念を自在に飛翔させる。［中略］

イエズス会士の真の罪科は彼らの道徳の邪悪さではなく、彼らの憲章、財富、権力、野心にある。（原註）彼らの利益がいかなる民族の利益とも相容れぬからである。

たが、人々は反論しよう。いかに完全な宗教的法制を持とうと、またいかに多くの民族を支配しようと、怖ろしいイエズス会士はいまやフランス、ポルトガル、スペインから追放された、と。然り！彼らの壮大な野望にやっと抵抗するようになったからである。

一般に修道会の憲章には根本的な欠陥がある。現実的な権力を欠除していることである。修道士の憲章は人類の狂気や愚昧に根ざしている。だから、人間精神が次第に開明的となり、狂愚を改めることは必然的である。したがって、これを予見するイエズス会士は、世俗的な権力と精神的な権力をみずからの手で結合するよう望んだ。短刀や毒薬で脅せぬ帝王を自己の軍隊で威嚇するよう企図する。こうした目的のためすでに彼らはパラグァイやカルフォルニアに新たな帝国の基盤を築いた。

（原註）法として制定られないかぎり、虚妄な道徳原理も危険なものではない[14]

ふたつの権力、精神的な権力と世俗的な権力が独裁者のもとで結合することは危険である。このように人々は言うし、私はも同感である。一般にすべての独裁者は、もっぱら己れの恣意を充たそうと望み、国民の福祉をほとんど省みない。臣民の幸福に無関心なのである。独裁者は自己の幻想や残虐性を正当化するため、しばしば精神的権力を利用する。[15]

イエズス会の政治的野望を道破するエルヴェシウスが、その管理下にある学園を厳しく評するのは当然である。本

稿で解明するように、たとえばコレージュ・ルイ・ルグランの教官陣容や教育内容はかなり複雑な様相を帯び、ヴォルテールやエルヴェシウスの思想形成にも役立った要素も多々あると推察できる。しかし、『人間論』における論述はイエズス会の教育に直接言及するかぎり、ほとんど全面的な否定であって、積極的な評価はみられない。カトリック教会や中世的な教育に対決する姿勢を明白に示すとしても、こうした哲学者たちの断定がコレージュに関する私たちの認識に先入観を植えつけたことはさきに指摘した。処女作『精神論』で聖職者の禁欲的な修行や隠遁的な生活を痛烈に批判したエルヴェシウスが、『人間論』においてはイエズス会士の独善、横暴、無能へとりわけ非難を向ける。

イエズス会士は教育の力を示す美事な事例を提供する。イエズス会が学芸における天才的な人物、すなわち物理学のニュートン、悲劇のラシーヌ、天文学のホイヘンス、化学のポット、そしてロック、ベーコン、ヴォルテール、ラフォンテーヌ、等々を育成しないとしても、天分を感じさせる生徒を彼らのコレージュに集めなかったわけではない。静寂な住居でイエズス会士が学業に専念できること、また彼らの生活様式が才能の開発に最適であることも判っている。それなのになぜ傑出した人物をほとんどヨーロッパに送り出せないのか。狂信と迷信に囲繞されて、イエズス会が指導者の言うままにしか考えないからである。決疑論や神学を学ぶのに幾年も没頭し、そうした勉学が健全な理性を反発させ、やがては腐敗させるからである。(16)

教育の非宗教化というエルヴェシウスの理論はこのようなコレージュ批判から導きだされる。彼が提唱するのは、学園から聖職者による管理と宗教的な教育内容を排除し、社会についての科学的認識や公民としての道徳性を培うことである。『人間論』における下記の言葉は、やがてフランス革命の時代にコンドルセによって確立される公教育思想の骨格を示している。

聖職者に公民の教育を委ねる民族は不幸である！彼らは正義について虚妄な観念しか授けない。授からない

ほうが、まだましであろう。偏見に染まっていなければ、真の認識にそれだけ近く、優れた教育をそれだけ受け入れ易い。そうした教育はどこに見出せるか。

優れた教育は人間の歴史のなかに、国々における法律の歴史、法律制定の事由の歴史のなかに見出される。だが、そのような源泉から正義の原理を引き出すことを、聖職者は許さない。彼らの利益がそれを禁ずる。なぜなら、そうした勉学によって人民が啓蒙されれば、各種の行為に対する毀誉褒貶が一般利益という尺度によってなされる。そのような暁にインドや日本の坊主、婆羅門の僧侶、聖者と称する者が尊敬されるだろうか。彼らの苦行、禁欲、盲従が公衆にどう役立つのか。それら修道者のいかなる徳も国民の福祉になんら寄与しない。公民としての徳、すなわち寛大な心、真理と正義の尊重、情愛や言辞への忠実さ、社会的な約定への忠節はまったく違う。こうした徳は真に有益なものである。したがって、聖者と有徳な公民の間にはいかなる類似性もない。（原註）

（原註）専制政治のもとでは敬虔ではありえても、有徳ではありえない。なぜなら、そうした政治は個人の利益を公益より切り離し、人心から祖国への愛を消滅させるからである。[17]

こうした非宗教化の提唱がカトリック教会自体に対する疑義に根ざしていることは言うまでもない。徴税総括請負人として民衆の窮乏をたえず目撃したエルヴェシウスは、聖職者に要する莫大な経費をとくに問題にする。また、宗教勢力と政治権力が共通の利害によって癒着している現実、これらが他民族に対する侵略を推進している現実への洞察も興味深い。ヨーロッパの列強によって浸蝕されるアジア、アフリカ、アメリカの実情を、若いときからエルヴェシウスはイエズス会宣教師の書簡などで多少は感知していたであろう

不寛容な宗教、その礼拝に莫大な経費を要する宗教は、勿論有害な宗教である。長年にわたれば不寛容が一

国の人口を減少させ、金のかかり過ぎる礼拝が破滅へと導く。カトリックの王国には一万五千の修道院、二万の小修道院、一万五千の礼拝堂、千三百の僧坊が存在し、四万五千の小教区を担当する九万の司祭、さらには無数の神父、神学生、あらゆる種類の聖職者がいる。彼らの総数は少なくとも三十万は下らない。その経費は強大な陸軍や海軍を維持するのに足りるであろう。国家の重荷となった宗教は、啓蒙された文明国の宗教としてながく留まることはできない。これに服従する人民は聖職者の奢侈と安楽のためにのみ働く。各々の市民がたんに聖職者団体の奴隷なのである。

正しい宗教であるためには、経費も少なく、寛容を貫くことが必要である。聖職者が市民に強いるようではいけない。聖職者に対する恐怖が精神と魂を堕落させる。一方を蒙昧にし、他方を卑屈にするのである。祭壇を祀る人にいつまで剣を握らせるのか。彼らの不寛容よってなされた蛮行を私たちは知らないだろうか。幾多の血が流され、いまも大地は赤く染まっている。諸国民の平和を確立するには、市民的な寛容だけでは足りない。教会勢力もこうした目的に協調することが望まれる。一切の教条が人類を覆う混迷と罪過の根源である。(18)

第四節　コレージュ・ルイ・ルグランの教育と哲学者エルヴェシウスの学生時代（その三）

―文法学級と修辞学級―

（一）

初期のイエズス会士には学園の経営や教師の経験が乏しく、多くはパリなどの既存のコレージュを模倣していた。しかし、生徒数の激増もあって新しい教育計画が希求され、一五五一年にはコレジウム・ロマーヌムでそれを体系化する試行が始まった。一五八四年イエズス会本部では『学事規範 Ratio studiorum』を採択し、総長アカヴィーヴァの名によって全管区に通達された。教育と学習に関するこの計画は、つとに『教団憲章』のなかでイグナティウス自身が提起し、各地から選ばれた学者六名が作成したものである。その後『学事規範』はイエズス会士の間で幾多の論議と修正を重ね、一五九九年に決定的な形態に纏められた。[19] 同年一月八日に発せられた総長書簡には、教育計画の重要性と成立過程がつぎのように誌されている。

【一】普遍的な学事計画、その制定と実施について四十年前に提案された計画が、完璧な形で完成し、今般各管区に配送される。多年にわたり総長閣下が完成と実施を待望されたにもかかわらず、学事における大きな支柱となるがゆえに、今日までこれを容易には達成できなかった。なぜなら、各管区の苦衷や要望を慎重に検討し、全員の諒解が得られるまで、また一斉に実施する計画として全員が快く受け入れるまで、多くの困難を

孕む微妙で複雑な事柄に関しては最終的な決着をつけないことが適切と考えられた。

【二】特別に任命された六名の神父が学事計画について綿密な論議を重ね、この分野における学者・専門家も精細な見解を提出している。こうした論議と見解のすべてが各管区に伝達された。妥当でない箇所や付加すべき箇所は特記され、計画全体への意見と最終的な論議も提示されている。こうした事業をほとんどすべての管区において果敢に遂行する一方、ローマではコレジウム・ロマーヌムのもっとも高名な学者、ならびに特別の任務と当地での滞在を命じられた三名の神父が、あらゆる見解と提言をあらためて仔細に吟味した。最後に総長閣下と総長顧問によって入念に検討されたあと、この学事計画はイエズス会全体に再度配送され、挙って遵守するよう全員に命ぜられた。[20]

一五九九年に採択された『学事規範』は、〈管区長規範〉から〈文法学者協会規範〉に至る二一の文書から構成され、さらに総計五二七の項目に細分されている。第一の文書〈管区長規範〉はイエズス会教育の目的、管区長の総括的な責任、教官の徴募と昇任について、第二の文書〈校長規範〉はコレージュ設置の意義、教官への指導・監督、生徒の通学や休暇などを扱っている。しかし、各段階の学級における教育の内容に関してとりわけ精細に指示するのは、教学監や教官に向けた数多くの規範である。一例として学級の編成、授業の巡察、教本の選択を定めた〈初等教学監規範〉を抜粋してみよう。

〈初等教学監規範〉

【二四二】目的

みずからが我らの学園における管理と編成のため、校長に積極的に協力するよう任命されたことを、教学監は自覚し、そこで学ぶ者が自由学芸においても人生の規律においても進歩を遂げるよう努力されたい。

【二四七】学級への巡察

教学監は各教官の授業を少なくとも二週間に一度視察し、以下の事項について監督されたい。すなわち、キリスト教の教義を学ぶのに適切な時間と配慮を当てているか、教育内容の履修と充実に極力努めているか、また尊敬に値する態度で生徒と行動を共にいるか。

【二四九】学級の五段階

教学監は初等諸学級をつぎの五段階に分け、それらの混合を防止されたい。すなわち、修辞学級、人文学級、三段階の文法学級。生徒数の増大のため管区長から学級の分割を指示された際は、各々の水準を同一に保たれたい。[中略]

【二五〇】文法書の三分冊

三つの段階を明確に区別するため、エマヌエル・アルヴァレスの文典を三分冊に分割し、各学級に割り当てる。

第一分冊は文法［第五］学級で使用され、エマヌエル・アルヴァレスの第一巻と同第二巻の統辞論導入によって構成される。

第二分冊は文法［第四］学級で使用され、エマヌエル・アルヴァレス第二巻に記載される八品詞から文の構造まで、それに比較的平易な補遺を扱う。

第三分冊は文法［第三］学級で使用され、エマヌエル・アルヴァレス第二巻の補遺第二、修辞の構造から巻末まで、さらに音節・韻律を論じた第三巻を扱う。

ローマの方式と異なる管区は、同じような仕方で三つの部分を三学級に配分されたい。(21)

ルイ・ルグランにおいても基本的な教育方針は『学事規範』に従って作成された。ただし、同校の伝統や社会的な要求を勘案して、細部では独自の学級編成や教育内容も工夫された。たとえば、一五九九年の『学事規範』では五学級の設置が指示されたが、ここでは第六学級から修辞学級まで六学級が開設されていた。この編成は遅くとも一五七九年より始まり、この第六学級は一七六二年まで存続する。[22] デュポン＝フェリエによれば、ルイ・ルグランの初等諸学級ではラテン語の学習を主体として、以下のような目標と教本が定められていた。

編成についても方法についてもすべての学級が似通っていた。しかし、習得させる知識の水準に関して各々に明確な位置と役割が定められ、学級の混同は生じなかった。

それらの学級はふたつの基礎的な部類、文法学級と人文学級に区別された。それぞれの程度に応じてどの学級でも文範を読み、著者について調べることを学ばせた。また、そうした文範や著者の応用として作文を書くことも勉強させた。

コレージュ・ド・クレルモンで文法学級を構成したのは、第六学級、第五学級、第四学級、第三学級である。フランスにおけるイエズス会コレージュのなかでこの学園は、第六学級からラテン語を教える少数に属していた。（九二校のうち十一校のみ。）

古い生徒であるコワイエ神父が書いたのは、おそらくそうした特殊事情である。「第六学級でなにを学ぶか？」と彼は自問自答する。「ラテン語である。第五学級では？ラテン語！第四学級では？ラテン語！第三学級では？ラテン語！」だから、ラテン語の文法書が文法学級における基本的な書物であったのも、驚くにあたらない。ギリシア語を教えるために、また十八世紀まではフランス語を教えるためにも、ラテン語が役立ったのである。ラテン語なくして文法はありえない。そして、神父たちによれば、文法なくして学ぶことも、知ることも不可

能なのである。文法を「諸学への門戸」と呼び、彼らは言う。「いかに明敏な精神でもみずからの欠陥を補うがよい。」

したがって、文法書の選択は重大な問題であった。スコラ的な定式に浸透され、曖昧にされた中世の文法書をコレージュ・ド・クレルモンが遠ざけたのは、きわめて賢明である。ドナートとプリシアン、エヴラールとベチューヌ、ヴィルディウーのアレクザンドル。これらの代りにジャン・デポテールのより堅実で実用的な文典が好まれた。ただし、この文法書でも抽象観念が多すぎ、規則も煩雑すぎる嫌いはあった。[23]

こうした授業においてとくに注目すべきは、生徒の組織化と表現力の育成である。イエズス会全体の雛形として、そこでは軍隊を想起させる階層と役割が設定されていた。すなわち、どの学級でも生徒はふたつの軍団、ローマ陣営とカルタゴ陣営に大別され、さらに組別・班別に細分される。そして、これらの集団を統率するのは、階層的な秩序に置かれた級長、隊長、組長、班長である。[24]『コレージュ・ド・クレルモンからリセ・ルイ・ルグラン』には初等諸学級におけるラテン語教育の実態が鮮明に描かれている。

コレージュ・ド・クレルモンにおいてこうした学級編成が成果を挙げるには、独自の教育方法を加味する必要があった。文典の朗唱、宿題の点検、著者についての説明、討論、定期的な調査に係わって、どのような方策が採られたかを述べてみよう。

生徒が着席し、祈りが捧げられると、授業が始まる。まず各班十名の生徒に班長がまず文典を朗読させる。その後班長、組長、委員が半時間朗唱を続ける。広い教室のなかで十、二十、三十と分散し、あちこちでラテン語の音節が蜂の声のように低く響く。それらは数人の唇から発せられ、つねに途絶えることも乱れることもない。というのは、隊長がつねに巡視しているからである。このような朗唱に教官が指示を与え、生徒への質

問を始める。ここで肝心なのは、ひとりの生徒も例外としないことである。否応なく朗唱をさせ、否応なく学ばせるわけである。

こうして最初の勉強を済ませた者に、文章の記述が課せられた。たとえば、ひとつかふたつの文を翻訳し、いくつかの半句を置き替えることである。ここで生徒は競い合った。中世ではこうした方法もなかったが、十六世紀にはコレージュ・ド・クレルモンの創立以前に普及が始った。これを流行させたのはイエズス会士である。彼らによれば、成功の鍵は課題の多様性もある。作文、翻訳、敷衍、字義、模作、対話、言説、対照が散文で扱われる平素の課題であった。韻文は牧歌、恋歌、哀歌、合唱曲、変形、寓意などの本来的な原動力と考えられた。各人の想像力の如何によって、寓話、諷刺詩、難問、象徴を散文で書いても、韻文で綴ってもよい。生徒に訓練させたのはラテン語かギリシア語、とくにラテン語であって、フランス語は稀にしか扱われなかった。

さきに述べたとおり、作文の流行が翻訳をはるかに凌駕した。作文の場合にはラテン語がフランス語醇化のためではなく、それ自体のために習得される。頻繁になされたのは、ラテン語からフランス語に翻訳された一頁を、逆にフランス語からラテン語に翻訳し、それらふたつのラテン語文を対比することであった。あらゆる角度から主題を考え、揺れ動く想像力を秩序づける技法を教えたわけである。キケロ、サリュチウス、カエサル、プリニウスなどの文筆家が選ばれ、彼らの流儀によって文章を書いた。均斉、抑揚、旋律に留意してキケロの文体を分解し、再構成した。対話や演説については古代の英雄が大抵模範とされ、ときにはキリスト教の聖者も選ばれた。(25)

（二）

コレージュ・ルイ・ルグランの教官としてポレが着任した一七〇八年、フランソワ＝マリ・アルエ、のちの筆名ヴォルテールは人文学級に在籍し、翌年修辞学級に入った。初等諸学級と人文学級を終えたエルヴェシウスは、一七三三年頃に修辞学級へ進んだと思われる。[26] この時期におけるルイ・ルグランの学風と修辞学級の有様については、ラセルヴィエールによるポレ評伝がとくに詳細である。

ここでコレージュ・ルイ・ルグランを念頭に浮べ、平日のある朝を想像してみよう。サン・ジャック街の大きな校門から通学生の大群が入っていく。彼らの大半はポレの生徒である。揃って目差す修辞学級の教室は、その品格に相応しく正面広場の奥、学園のもっとも美しい場所にある。他方寄宿生は学寮監に伴われ、広場に面した沢山の部屋から降りてくる。これらの生徒が群れをなし、広大な教室にも収容できないほどである。大抵は二〇〇人から三〇〇人の生徒に及んだ。［中略］

最初の半時間は教本の朗唱は当てられ、これを担当するのは各班の班長から各陣営の隊長までである。この間に教官は数名の生徒を自席に呼び、前日の宿題を点検する。ルイ・ルグランのように三〇〇人以上の生徒が単一の教室に集まるところでは、ひとりの教官で毎日全員の答案を読むことは勿論できない。家庭教師や学寮監の補佐が必要なのである。いかなる生徒も少なくとも毎週一度は専任教官による宿題の点検を受ける、と『学事規範』では指示されている。［中略］

教本の朗唱が済むと、宿題の点検が全員に公表される。いくつかの答案が提示され、誤りを冒した箇所が指

摘される。それらの箇所の訂正をまず本人に求め、できない場合には対抗する陣営の一員が添削し、自軍の得点を増す。こうした特異な点検の仕方は生徒のうちに行為の活発さ、態度の沈着さ、論議の精密さを培うものであり、ポレの熱情に美事なほど合致していた。「話す技術を習得するために、」と彼は著書『修辞学』において述べる。「若者に語らせることが必要である。初めて得た知識を確認するのには、直してくれる友人の前で語ることほど確実な試みはない。」[27]

この学級の教育目標や指導方法は『学事規範』の一章「修辞学教官規範」において基本的に定められている。まず修辞学級の日課としてどのコレージュもような時間配分を行う。すなわち、午前の第一時限には宿題の点検と訂正、生徒自身による教本の閲読と翻訳、ついで第二時限には教官の講義、宗規の理解、ならびに質問と討論。また、午後の第一時限に教官の講義や宗規の理解をさらに進め、第二時限にはとりわけギリシア語の古典について学ぶ。なお、土曜には第一時限を主として一週間の授業の復習に、第二時限を生徒自身による報告やスピーチや講義に当てる、と。[28] こうしたイエズス会の指示を遵守しながら、コレージュ・ルイ・ルグランでは教育の内容や指導の方法に独自の創意が盛り込まれていた。とりわけポレの講義ではテキストの暗誦や模倣ではなく、古典の深い読解によって生徒の知性と心情を涵養することが重視された。

いよいよ授業の神髄に接することにしよう。ここまで教官は生徒集団の活動を覚醒し、指導するのみであった。教官の真価を発揮するとき、偉大な文筆家の一文を評釈しつつ、己れの蘊蓄を生徒に分ち与えるときが来た。これが講義と名づけられる。イエズス会でも重視された教育方法にほかならず、『弁論家教育』のなかでポレは優れた範例を示している。ここにおける訓練の目的は、ラテンまたはギリシアの文筆家について該博な知識を生徒に授けることではなく、むしろ彼らの知性と心情を育成すること、実りある読書の手ほどきをし、

厳選された原典の美事さを理解させることである。「注意深く読むがよい。沢山読もうと願うのではなく、感銘を受けた箇所ではゆっくり立ち止まり、美の根源を見極める、作文の模範となるものも見出すがよい。」（ポレ著『弁論家教育』第七講）［中略］

ポレの講義は美事な文章を解説するだけでなく、原典の注釈から多方面に拡大した。原著者をめぐる芸術、文学、考証、道徳、さらには宗教の問題にまで飛躍したのである。だから翻訳と注釈のあと彼は、考証家としてよりもむしろ弁論家として話した。ジュヴァンシーと同じく、古代の文筆家についての講演が、「歴史、寓話、古代の制度、あらゆる分野の考証」に係わる多様な知識を生徒に与える機会とみなされていた。文例を選ぶにあたってポレがとくに留意したのは、生徒への指導の裏づけであり、文体や構成作に関する原著者の技法を把握することであった。論理の展開や連鎖を明確にしたり、微細な箇所まで充分に説明するため、デモステネスやキケロの弁論がしばしばスコラ論議の形態に改変される。プリニウス、オーヴィド、ヴェルギウス、セネカなどが類似や対比によって才知ある表現を示す方法、また彼らが時間、場所、人物を巧みに構成して絶妙な展開を導く方法も扱われた。[29]

修辞学級における講義の題材として『学事規範』はまずギリシアの古典を指示し、具体的にはデモステネス、ツキジデス、ホメロス、ヘシオドス、ピンダロスなどを挙げる。ついで聖グレゴリウス、聖バシリウス、聖クリュソストモスなど、四世紀から五世紀にかけての教父が推奨され、とくに言語表現を学ぶよう付記された。[30] こうした教育内容にルイ・ルグランでは今日的・実用的な観点が加味され、ポレの講義においてギリシア・ローマの古典と同時代の作品の比較対照、フランス語による詩作の訓練も試みられた。いくつかの証左を示してラセルヴィエールは以下のとおり述べる。

古典的なテキストを扱いつつ、しばしばポレは現代の文筆家による類似の文章を提起した。同時代の名作に籠められた流麗な文章を青年に認識させ、各自の批判的精神を啓発する好機なのである。テラメネスの有名な叙述とホネロスによる類似の情景描写を対比したことを、ディドロは私たちに伝えている。[中略]

一七二二年に出版された『弁論家教育』の結語でポレはつぎのように説く。ブルダルー、フレシエ、フェヌロンを生んだフランスではギリシアとラテンの文筆家だけが模範ではない、と。コレージュの慣例を大胆に破りながら、この著作を書いた彼は、「偉大なアリストテレス、ローマの類稀な雄弁家、クィンテリアヌス、ヘルモゲネス」の権威だけでなく、「遍く評価された現代の文筆家」からも多くを学んだ。「古代ギリシア古代ローマだけでなく、現代フランスの精華」からも範例を摂取したと言うのである。[中略]

今日のコレージュにおけるほど頻繁ではなかったが、ポレの時代にはフランス語の訓練もルイ・ルグランで無視されてはいない。社会へ巣立った生徒が、書簡や軍事報告や行政書類を作成するのに、困惑することはなかった。これには多くの証左が見出される。第一にはラテン語やギリシア語の翻訳以上に適切なフランス語の訓練があるだろうか。毎日教官に指示されて生徒が熱心に取り組み、短所があれば対抗陣営の好敵手から狙撃される厳しさである。こうした翻訳からラテン語の作文や創作へと進む。

ルイ・ルグランでは韻文を綴ることが盛んに行われた。ヴォルテールの伝記によれば、詩作の試みをポレから大いに鼓舞されたと言う。ただし、年少の生徒にはそれが許されなかった。早々と詩作を始めたことを、早熟な天才ラドンブリエは厳しく叱責された。モリー枢機卿もつぎのように伝える。「フランス語による詩作を堅固な教育計画に組み入れてはならぬ、とポレは幾度も述べた。なぜなら、月並みな満足や惰性に大抵は陥り、きわめて容易な勉強ともきわめて困難な勉強とも言えるからある。また、このように平板な営みを年少のとき

から許すことには、厳粛で有益なあらゆる勉学から生徒の精神を逃避させる危険が存する。」しかし、学業を重ねた年長の知性には、詩作がきわめて有益な訓練であった。修辞学徒ヴォルテールの軽妙な韻文は、恩師の挑発ないし勧誘に発する。たとえば、彼の美しい作品、『押収された嗅ぎ煙草入れ』と『王太子に対する傷病兵の請願』がそうである。[31]

とはいえ、修辞学級の主要な目標はイエズス会によって弁論術の涵養と規定されていた。『学事規範』によれば、コレージュにおける弁論術とは韻文または散文の述作を基礎とし、口述、文体、学識の三要素から成る。ここではアリストテレスの修辞学と詩学が推奨され、さらにキケロの全著作が最良の模範として賞揚された。ギリシア古典の学習やフランス語の詩作も雄弁術習得の一環として位置づけられる。[32]こうした修辞学級の目標は五大陸で展開されるイエズス会士の布教活動を準備するとともに、王侯貴族や高級官僚の政治力を育成するものであったに相違ない。修辞学生の弁論は文学や宗教の領域に止まらず、しばしば政治や法律の問題にまで及んだ。ルイ・ルグランにおいてこうした修練が公開討論という集団的な活動を通しいかに仕上げられたかを、ポレ評伝は私たちに教える。

修辞学生がフランス語で述作する機会は、なによりも弁論の訓練という形で提供された。ルジェ神父によって創案され、ポレのもとで仕上げられた公開討論は、ほとんどの生徒、将来大勢の集会で演説する使命を担う生徒にとって最良の修業であった。[中略]

こうした弁論の題目としてポレは多くの場合一般的な課題を提起した。そこには古代の雄弁家がしばしば論議したものも含まれる。「哲学、歴史、詩歌、雄弁。これらのうちなにが優位に立つか?」「フェニキア人の植民地が築かれる。農民、職人、商人、兵士。これらのうちどの階層がもっとも有用か?」「慈善として遺産を贈る対象として、いかなる種類の不幸がもっとも適切であるか?狂者、盲人、孤児、老人。これらのいずれか?」

「ある人が四人の友からさまざまな恩恵を受けたとしよう。第一の友は重病の身を治してくれた。第二の友は私財を費やして困窮から救ってくれた。第三の友は法廷で弁護に立ち、冤罪を晴らしてくれた。第四の友は懶惰と放蕩の生活から引き上げてくれた。これらの友のうちもっとも大きな恩恵を与えたのはだれか？」〔中略〕

生徒の関心をとくに集めたのが弁論であって、若い修辞学徒は深刻な論議にも物怖じしなかった。一七二二年八月二八日の公開討論は「遺産のもっとも公正な配分」を主題として行われた。ある一家の次男が自己の立場を訴え、長男の権利を激しく攻撃する。「父はどの子どもにも等しく愛情を注いだではないか。現状を眺めると、大家族の長男は大抵怠け者か放蕩者になる。労なくして財富を手に入れるからである。自分より幸運な兄に弟たちは心底からの憎悪と燃えるような嫉妬を感じる。」これに対してほかの生徒が応答する。「長男の権利を消滅させれば、貴族制度自体の破壊に至る。どれほど莫大な財産でも、度重なる分割に耐えうるものではない。それは家族的な上下関係をすべて崩壊させる。また、次男三男が貧乏な労働や活動に従事する必要も消え、教会や軍隊や植民地における彼らの奉仕を国家は期待できないようになる。」軟派の若者である第三の生徒は、ときには「持参金なしに」結婚する娘の立場を弁護する。そして、第四の生徒がこれらすべてを調停するよう努力し、自由に財産を分与する権利を父母に認める。「父はみずからの配慮と労働によって財富を獲得した。それを自由に使わせるのが、公正ではないか。なんだって！財産を消散させることも、不肖の息子に相続させることも許すのか？子どもが親不孝か、不従順であるとしよう。相続させないという脅しで手綱を締め、相続させるという希望で努力を喚起することが、彼らを教育する有益な方法ではないか？」

裁判長の判決は注目を浴びる。（こうした論戦の間に裁判長はかならず教官の論評を朗読する。）「高貴な家門の財産は不均等な配分」が望ましい、と裁判長は宣告する。財富の三分の二は長兄が相続し、残り三分の一

を弟たちに配分するがよい。こうした配慮に欠ければ、貴族制度は消滅する。反対に庶民の一家では平等な配分のほうに利点がある。「低い階級に属する臣民が無産者に留まり、技芸や商業を活発にすることを公益は命じる。平等を獲得した臣民が貴族に接近し、拮抗すれば、それらは必然的に衰退するであろう。」『メルキュール・ド・フランス』の編者は補足して以下のように述べる。「この種の集会に好んで参加した数多の聴衆は、投票によって当日の判決に強い賛同を表明した。」[33]

（三）

コレージュ・ルイ・ルグランの修辞学級にエルヴェシウスが在学したのは、一七三三年から一七三五年までと推定される。セーヌ右岸のジェフロワ＝ラスニエ街に住む彼は、シテ島を越えてカルティエ・ラタンのサン＝ジャック街まで通学した。修辞学級の教官ポレはすでに二五年以上在職し、円熟の境地に達していた。サン＝ランベールによる小伝『エルヴェシウスの生涯と作品』はエルヴェシウスに対するポレの薫陶についてつぎのように伝えている。

当初は教師の専制、威嚇的な口調、学園での身の束縛が、エルヴェシウスを反抗させた。下らない仕事の強制にも嫌悪を催した。だが、修辞学級に進学した後あと、教師のポレ神父はこの生徒が称賛にきわめて敏感であることに気づいた。すこし努力したエルヴェシウスは、ポレに褒められて、一層努力するようになった。詩文の敷衍がコレージュでは当時流行していた。そうした勉強において彼がほかの生徒よりも豊かな思考と想念を示すことを、ポレは認めた。そのときから神父はエルヴェシウスが彼に特別の教育を授けるようになる。古代の著作も現代の作品も彼と一緒に読み、それらの素晴らしさや物足りなさを認識させた。ポレ自身の文章は

優雅なものとは言えない。だが、文学への卓越した見識を持っていた。模範的な文筆家ではないが、教師としては優秀であった。己れの生徒の知力と性格を洞察する才能が、ポレには備っていた。多くの偉大な人物の天分を早くから見抜き、育成したことで、フランスに多大の貢献をしたのである。[34]

少年エルヴェシウスを反抗的なさせたのは、ルイ・ルグランの厳格な管理体制だけでなく、文法学級や修辞学級の教育内容そのものにほかならない。すでに述べたとおり、一七五八年に刊行された『精神論』のなかで彼はコレージュでの古典語偏重を鋭く批判した。ラテン語やギリシア語が青少年にとって難解であり、現実の社会で役立たないからである。こうした理論の展開としてエルヴェシウスは、コレージュで数学、物理学、歴史、文学、母国語など近代的な教科を重視するよう主張する。

味気無い言葉の学習に代えて、物理学、歴史、数学、道徳、詩歌などの学習を導入すれば、大きな情念にまだ攪乱されない時期に少年の意欲がどれほど燃え上がることであろう。「死語の学習も」と反論が続く。「ある程度同じ役割を果す。原文を読解し、解説できるよう、青少年を訓練しよう。彼らは古代の名著に取り組み、最良の思想を脳裡に刻む。」「しかし、」と筆者は答えよう。「翻訳で読めば、二ヵ月か三ヵ月で済むのに、古代の事実や文章を数年もかけて覚えるのは愚かではないか。八年あるいは十年の勉学から得られるものは、ラテン語の繊細な表現、翻訳で失われる微妙な綾を漠然と摑むことだけである。漠然という言葉を筆者は強調したい。どれだけラテン語を学んでも、母国語ほど完璧には理解できぬからである。自国語の美しさ、力強さ、繊細さすらよく知らぬフランスの学者が、首尾よくラテン語の表現を把握できるだろうか。世人の無知と軽信、学者自身の無謀さがこうした学問の基盤であることをだれが疑おう。ホメロス、ヴィルギリウス、キケロの霊を呼び起すとしても、現代の修辞学者のもっとも美しい論述を彼らは理解不能な唐人言葉と思う。一歩を譲っ

て、ラテン語の精妙な表現を会得して、卒業した青年を考えてみよう。だが、八年から十年のにわたる労苦で得られた学識に歳月に世間は充分報いるだろうか。(35)

ルイ・ルグランでつとにポレ神父は、ギリシア・ローマの古典を理解だけでなく、同時代の文学作品やフランス語による文章表現を教育内容に組み入れた。また、修辞学級の仕上げとも言うべき弁論や公開討論では、政治、経済、法律に係わる論題もしばしば提出された。勿論このような試みも学業の主軸として近代的な教科を学ばせることからはなお程遠い。しかし、現実生活での有用性と有為な社会人の育成を強調するエルヴェシウスの教育思想が形成される際、恩師ポレの斬新な教育活動がひとつの源泉となったと推察できる。教育改革に関する『精神論』の叙述はさらに続く。

いかなる情念もまだ知識欲を攪乱しない少年期には、学業への専念が可能である。こうした時期の八年ないし十年を言葉の学習にではなく、事象の学習、将来の職務に係わる事象の学習に振り向けよう。とはいえ、狭量な人たちが主張するように、青少年の勉学を身分相応の勉強に限定するのではない。将来に備えてさまざまな側面から彼らの教育を整備しよう。天才は飛翔することを欲する。また、すべての公民に必要な知識もある。道徳の原理や自国の法律に関する知識がそれに当たる。しかし、将来の職務に向けた用意を怠ってはならぬ。主として職務に関する事柄を青少年に覚えさせよう。甲は財務に就き、乙は軍隊に入り、丙は行政か司法を担当する。これら三人に同一の教育を授けるほど愚かな業があろうか。十六か十七の年齢、すなわち社会に巣立つ年齢までだれもが同じことを学ぶ。社会に出れば、種々の邪念に乱され、鋭意勉励が難しいのに。

青少年になにを学んでいるか、点検してみよう。彼らの学業と将来の仕事を対比してほしい。愚かなギリシア人を笑えるだろうか。オリンピア競技をめざし、レスリングや競走の優勝を狙う者に、彼らは横笛の教師を

授けた。［中略］

王侯貴族は枢要な地位に就く定めにあるのに、なぜ彼らの教育を放置するのか。彼らが英邁であるか否かによって、また彼らが公正であるか否かによって、国民の幸不幸は決まることを考えてほしい。こうした政治の根幹をなぜ偶然に委ねるのか。コレージュにも聡明な人物が数多存在し、教育の欠陥を痛感して、改善の方策すら提示した。だが、政府の援助なしにそれを実現できるだろうか。しかし、政府は公教育になんらの配慮も示さない。この問題について強大な帝国と弱小な共和国を比較しよう。大国では偉大な人物をあまり必要としない。広大な領土を基盤として、国家が安泰だからである。小国は違う。怒濤のようなアジアの攻勢にスパルタの非力な国軍が立ち向う。偉大な人物の活躍なしにスパルタが存続できただろうか。英傑がかならず出現するよう、為政者は公教育を重視した。大国には滅多に国難が訪れない。だから、公教育が等閑にされる。まさしく必要は発明の母である。「しかし」と反論する人もあろう。「どんな大国でもときには偉大な人物が求められる」確かにそうである。ただし、そうした必要は稀にしか生ぜず、あらかじめ準備できない。大国で百年の計を立てることは難しい。そこでは為政者が通常の国務に忙殺され、公教育の問題に手を触れない。(36)

イエズス会きっての名門校においてポレは修辞学教官の地位を三三年間保持し、彼を支える基盤が多少とも同僚の間に存したと思われる。同校の多彩な教官陣容は正規の学生以外にも多くの青年を惹きつけていた。しかし、ルイ・ルグランの基本的な教育方針は『学事規範』の遵守にほかならず、他のコレージュと同じく本質的には聖職者団体の支配下にあった。やがて啓蒙運動の苦難と自著『精神論』への弾圧のなかで、エルヴェシウスはカトリック教会とイエズス会の悪弊を痛感するに至る。その続編とも言うべき遺作『人間論』では、そうしたカトリック教会の役割や聖職者の教育活動に、冒頭から痛烈な非難を浴びせている。

人間は無知な存在として生まれる。愚昧な存在として生まれるのではない。愚昧となるにも手だてが必要なのである。愚昧な存在に変え、生来の知恵まで抜き取るには、技術と方策が求められる。教育によって私たちのなかに錯誤に錯誤を積み重ねること、絶えざる読書によって私たちのうちに偏見を蓄積することが必要なのである。

文明民族においてほとんどの人々が蒙昧な状態にある場合は、教育という伝染病に原因が見出される。すなわち、似非学者に教えられ、愚劣な書物を読んだためである。人間と同じく書物に関しても友は類を呼ぶ。優れた書物は大抵どこでも禁書とされる。知性と理性は良書の刊行を望む。だが、これに反して狂信家は世界への号令を念願とし、蒙昧の伝播に利益を感じる。彼らが意図するのは、人々を盲目にすること、似非学問の迷路に人々を追い込むことである。[中略]

言葉に強いスコラ学者も推論には弱い。彼らがなにを育てるか。愚かな物知りか傲慢な愚者である。(原註)すでに指摘とおり、愚者にもふたつの種類がある。生来の愚者と後天的な愚者、無知に起因する愚者と教育に起因する愚者である。いずれが癒し難いか。後天的な愚者である。無知な者には学ぶことが可能であり、勉学の意欲を燃え立たせれば足りる。しかし、理性の向上を念じながら、徐々に理性を萎ませた愚かな物知り、高すぎる値段で痴愚を獲得し、決して払い捨てようとしない人々はどうか。愚昧な学者によって彼らの精神はあまりにも重い荷物を背負されている。真理の高みまで登ることが彼らにはもはやできない。真理に到達する意欲を喪失しているからである。[中略]

スコラ学の黄金時代は蒙昧の世紀であって、ルターとカルヴィンの出現まで暗闇が地上を覆っていた。「あらゆる民族を」とイギリスのある哲学者が語る。「当時は迷信が支配していた。ネブカドネザルのように禽獣

や騾馬に変えられた人々は、くつわと手綱に縛られて、重荷を背負い、迷信の重圧に喘いでいた。だが、幾匹かの騾馬がついに後脚で立ち上り、荷物も騎士も転倒させるに至った。」

スコラ学者に委ねているかぎり、いかなる教育の改革も期待できない。そうした教師のもとで授けられる学問は、錯誤の学問にすぎない。

（原註）スコラ学者の学問とはいかなるものか。言葉を乱発し、語義を曖昧にする学問である。かって魔術師は蛮族の言葉を用いて、魔法の城やその類いを築いたり、壊したりした。古代魔術師の権力を継承したスコラ学者は、もっとも愚劣な夢想に学問の装いを凝らす。そうした魔法を打ち破る方策は、彼らが弄する言葉について厳密な意味を問いただすことである。明確な観念を示すように迫られて、魔法は溶け、学問の威厳は消える。学校でしか用いない言語で綴られた文書に疑念を向けるがよい。明確な観念を抱く人には日常的な言語で大抵は足りる。欺くことではなく、教化することを願う人は、自分の言語を話すがよい。[37]

〈註〉

本稿における主要な文献に関して左記の略号を使用する。（原則として大文字は著者の頭文字を、小文字は書名の頭文字を表わす。）

甲　哲学者エルヴェシウスの著作

Hel　：Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, *Paris*, Durand, 1758.

HeM　：Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, texte revue par Jacques Moutaux, Paris, Fayard, 1988.

Hhl : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, Londres, Societe typographique, 1773. 2 volumes.

HhM : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, texte revue par Geneviève et Jacques Moutaux, Paris, Fayard, 1989. 2 volumes.

HoL : Claude-Adrien HELVETIUS, *Oeuvres complètes, éd.* par L. La Roche, Paris, P. Didot l'aine, 1795. 14 volumes. (Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildsheim, 1967.)

エネーメ：エルヴェシウス著、根岸国孝訳『人間論』明治図書、一九六六年。

二　その他の主要な文献

Ch : Ian CUMMING, *Helvétius, His Life and Place in the History of Educational Thouoght*, London, Routledge et Kegan Paul Ltd, 1955.

Che : J. CRETINEAU-JOLY, *Histoire religieuse, politique et littéraire de la Compagnie de Jésus, Paris*, Jacques Lecoffre, 1859. 4 volumes.

Del : Gustave DUPONT-FERRIER, *Du College de Clermont au Lycée Louis le Grand (1568-1920), la vie quotidienne d'un collège pendant plus de trois cent cinquante ans*, Paris, De Boccard, 1921. 3 volumes.

DDe : Denis DIDEROT et Jean D'ALEMBERT, *Encyclopédie, ou dictonnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers* (reprints, Stuttgart, F. Frommann, 1967.)

Do : Denis DIDEROT, *Oeuvres complètes*, presentées par A. W. Wilson et al., Paris, Hermann, 1975.

Drs : *Ratio studiorum, plan raisonné et institution des études dans la Compagnie de Jésus, édition bilingue latin-fracais*, présentée par Adrien Demoustier, *Paris, Belin, 1997.*

Ehe : G. EMOND, *Histoir du Collège de Louis-Le-Grand, ancien Collège des Jésuites à Paris depuis sa fondation jusqu'en 1830*, Paris, Durand, 1845.

Kh : Albert KEIM, *Helvétius, sa vie et son oeuvres*, Paris, 1907. (Slatkine reprints, Geneve, 1970.)

Se : Jean Francois de SAINT-LAMBERT, Essai sur la vie et les ouvrages d'Helvétius. dans *HoL*, tome I. pp.1-176.

Sp : J. de la SERVIERE, *Père Charles Porée S. J., un professeur d'Ancien régime*, Paris, Oudin, 1899.

(1) *Chc*, volume I, pp.58-59.
(2) *Chc*, volume I, pp.58-59.
(3) *Dcl*, tome I, p.40.
(4) *Dcl*, tome I, pp.40-42.

デュポン＝フェリエの著作は別として、このような階層秩序と管理体制がイエズス会教育に関する多くの文献ではほとんど言及されていない。

しかし、十八世紀の中葉に刊行されたディドロ＝ダランベール編『百科全書』は教団の独裁体制に対する忌憚のない攻撃を含んでいる。なかでもディドロ自身の執筆と推定される項目〈イエズス会士〉には以下のような記述が見出される。

「イエズス会の体制は君主制である。あらゆる権威はひとりの意志に宿っている。

僧院で極端な専制政治に服するイエズス会士が、国家においてきわめて卑劣な扇動者となる。臣民には君主への限りない服従を、王侯には宗教規範の独立性と教皇への盲目的服従を、彼らは説教する。ひとりを操って、万人を自在に動かすため、彼らは教皇の不可侵性と世界支配を容認する。[中略]

どの地域の管区長の毎月一度総長に書簡を提出するよう命じられている。学園の校長、修道院の院長、修練士の導師も三ヵ月毎に報告する。

僧院やコレージュについて、当該地域に係わる一切について周到詳細に説明するよう、すべての管区長が厳命されている。また、校長はふたつの一覧を送付するよう求められる。ひとつは臣民の年齢、国籍、階級、学歴、行動に関する一覧であり、いまひとつは臣民の精神、才能、性格、品行に関する一覧である。一言で述べれば、こうして臣民の美徳と悪徳が総長に報告される。」

(*DDe*, tome VIII, p.513. cf. Do, tome V, pp.207 et. tome VII, pp.467-468.)

(5) *Dcl*, tome I, pp.39-42.
(6) *Del*, tome I, pp.42-44.
(7) *Sp*, pp.1-2, 4-7.
(8) *Del*, tome I, pp.38-39.
(9) *Del*, tome I, pp.38-39.

(10) *Sp*, pp.27-29, 32.
(11) *Del*, tome I, pp.56, 58.
(12) *Sp*, pp.vii-xiv, 7.
(13) *Sp*, pp.9-12.
なお、デュポン＝フェリエ著『コレージュ・ド・クレルモンからリセ・ルイ・ルグランへ』でもポレへの評価はきわめて高い。
「生徒の間だけでなく、コレージュの外、〈紳士方〉という公衆の間でもポレは絶大な権威を持っていた。彼のような人物に委ねられるや、わが学園の修辞学担当もどれほどの高みに達するかが立証された。ひたすら教師であることをポレは望んだ。教職が彼を偉大にし、彼は教職を向上させた。」
(Del, tome I, p.223.)
(14) *Hhl*, tome II, pp.257-258, 261-262. *Hol*, tome X, pp.170-171, 174-175.
Hhm, tome II, pp.634, 636-637.
政治的な策謀や他民族への侵略が反宗教改革の運動としばしば表裏一体であったことは、『百科全書』の項目〈イエズス会士〉でも暴露されている。
「イエズス会憲章の奇妙な条項は、教団を構成する全員が誓約によって互いに密偵や密告者なるよう定めている。
この教団は結成されるや、富裕になり、巨大となり、強力になった。まもなく彼らはスペイン、ポルトガル、フランス、イタリア、ドイツ、イギリス、北欧、南欧、アフリカ、アメリカ、中国、インド、日本へと進出し、どこでも野望を拡げ、恐怖を書き立て、騒乱を惹き起した。国法を無視し、自由気侭に振舞う彼らは、世界を支配する天命を受けたのように、到る所を行進している。」
(*DDe*, tome VIII, p.513. *Do*, tome VII, p.468.)
(15) *Hhl*, tome I, pp.145-146. *HoL*, tome VII, p.149. *Hhm*, tome I, p.136
(16) *Hhl*, tome I, pp.123-124. *HoL*, tomeVII, p.124. *Hhm*, tome I, p.121.
(17) *Hhl*, tomeI I, pp.663-669. *HoL*, tomeXII, pp.121-123. *Hhm*, tome II, pp.913-914.
エネニメ、一七三―一七四頁。
なお、この項ではイエズス会を名指しで批判した箇所をふたつ引用したが、一七九五年刊行のラ・ロッシュ監修『エルヴ

ェシウス全集』では、いづれについても重要な部分が改竄されている。詳しくは左記の論文を参照して頂きたい。拙稿「エルヴェシウス著『人間論』の刊行と改竄ー書誌学上の諸問題とその政治的・国際的背景ー」『フランス教育学会紀要』第三号（一九九一年）、二一ー三二頁。

(18) *Hhl*, tome I, pp.97-101. *HoL*, tome VII, pp.99-101. *Hhm*, tome I, p.105-106.
エネニメ、五二ー五三頁

(19) Francois de DAINVILLE, *Les Jesuites et d'education de la societe francasise, la naissance de l'humanisme moderne*, Paris, Beauchesne et ses fils, 1939. pp.72-80.
Adrien DEMOUSTIER, Les Jésuites et l'enseignement a la fin du XVIe siecle. dans *Drs*, pp.19-20.

(20) Jacques DOMENICHI, Lettre d'envoi du 8 janvier 15999. dans *Drs*, p.72.

(21) *Drs*, pp. 134-135.

(22) *Dcl*, tome I, pp.195-196.
『学事規範』についての論議や整備が進行する十六世紀の末葉、コレージュ・ド・クレルモンとフランス管区は重大な危機に瀕していた。その概略を述べると、一五八九年フランス国王に即位したアンリ四世は、各地に転戦して、国内統一を達成した。さらに新旧両信徒の和解を図り、一五九四年信仰の自由を認めたナントの勅令を発布する。翌年の一二月ルーブル宮において国王は暴漢から短刀で切りつけられた。この刺客はシャテルと名乗るイエズス会士であり、コレージュ・ド・クレルモンに寄寓していた。陰謀への連座を疑われて、事件の直後この学園は捜索を受ける。さらに一六一〇年五月一四日ルーブル宮近くの路上でアンリ四世はイエズス会ラヴェイヤックに刺殺された。イエズス会が囂々たる非難を浴び、存亡の淵に立たされる。これらの事件については、エモン著『コレージュ・ルイ・ルグランの歴史』が詳細である。 cf. *Ehc*, pp.55-61, 85-89.

(23) *Dcl*, tome I, pp.212-213.

(24) *Dcl*, tome I, pp.200-201.

(25) *Dcl*, tome I, pp.202-203.

(26) *Ch*, .pp.9-10.
ヴォルテール研究の権威ポモーは当時の書簡と記録を精細に検討し、左記のように報告する。「一七〇九年ー一七一〇年度にアルエ［ヴォルテール］は修辞学級に在学し、ここで決定的な影響を受けた。さらに一七一〇年ー一七一一年度に彼は

哲学を学んだが、当時は修辞学の授業が優れ、哲学の授業はお粗末であった。アルエは修辞学生のなかでも傑出していた。J－B・ルソーは一七一〇年八月の表彰の際彼に注目した。タルトロン神父は〈詩文に関し感嘆すべき素質をもつ少年〉として彼を偉大な人物に紹介した。[中略]

頭角を現したルイ・ルグランの修辞学級でアルエはふたりの教官より指導を受けた。一七〇九年－一七一〇年度はルジェーとポレである。ルジェーは気難しく粗野で、まもなく教職から離れ、ポレは着任したばかりであった。ヴォルテールの気持が後者に傾いたのはもっともと言える。」

(Rene POMEAU, Voltaire au college. dans *Revue d'histoire litteraire de la France*, 52 année (1952), pp.4-5.)

(27) *Sp*, pp. 58-59, 61-62.

(28) *Drs*, pp.165-166.

(29) *Sp*, pp. 62-63, 66.

ルイ・ルグランの修辞学級では古典の読解と詩文の創作が統一的に指導された。デュポン＝フェリエの研究にはポレ以外の教官の実例も明らかにされている。

「ショヴァンシ神父の修辞学は多少異なっていた。①発想、②叙述の構成、③措辞、④敷衍。陳述、賛辞、根拠、対立、比較、範例、古人の証言などを用いて文章を展開する方法が教えられた。[中略]

論文と詩を文書室や食堂で朗読することもできた。若干の作品は印刷の栄誉を与えられ、今日まで遺っている。それらには豊かな知性、表現の巧みさ、天性の闊達さが感じられる。しかし、どの頁も教官によって手直しされたことはほぼ確かあろう。そこから読み取れるものは、作ってほしかった文章であって、作ったままの文章ではない。なお、もっとも優秀な生徒には準備なしに来賓の前に立ち、ギリシア・ラテンの古典的な詩人について解説するよう指示された。彼らの天分や性格、人生の行路、作品の構成、批評家に指摘される美点や欠点について語ったのである。」

(Dcl, tome I, pp.227-229..)

(30) *Drs*, pp.165-166.

(31) *Sp*, pp.66-67, 70-71, 75-76

一七五一年に刊行された『聾唖者書簡』のなかにポレの講義を聴講したディドロの証言が見出される。修辞学や詩学を論じたこの著作から関連部分を引用したい。

「ラシーヌの悲劇に関してこの箇所のあらゆる美しさをルイ・ルグランで学ばた際には、それらがテラメネスの言葉の移

植であること、テレスが彼を引き留めて〈わが子の肉と髪をそこに遺し、我に向けて語らしめよ!〉と叫んだことを、かならず教えたはずである。

〈アンチロクスが〉と高名なポレは付言した。〈パトロクレスの死をアキレウスに伝えたのは、こんなやり方ではない。アンチロクスは眼に涙を浮かべて英雄に近づき、ふたつの言葉で怖ろしい報知を果たした。〈パトロクレスはもはやいない。彼の屍のため戦う。ヘクトルは武器を整えた〉[中略]

こうした仕方で有能な教師が私たちに教えた。確かに彼は才知と雅味を有していた。〈ここに最後のギリシア人あり〉と評してもよかった。だが、修辞学者の総帥は今日一般になされていることを試行しただけである。

ベルニ神父に再度尋ねよう。ラシーヌの叙述は移植にすぎない、と主張されるのか。三十年か四十年まえにポレ神父が、まさしくとおり私たちに教えたのか。私が引用した箇所について悪趣味だと神父が非難しただろうか。」

(Denis DIDEROT, Lettre sur les sourds et muets. dans *Do*, tome IV, pp.180-181.)

(32) *Drs*, pp.165.

(33) *Sp*, pp.77-78, 81-82.

修辞学級の主要な目的が弁論術の涵養に存したことを、デュポン＝フェリエもつぎのように述べる。ただし、彼の著作には公開討論に関する記述がほとんど見当たらない。

「ルイ・ルグランの栄誉を高めた教官のひとりジョヴァンシは、エリートのために数多の政治的社会的活動をここでは用意したと解説する。なぜなら、説得術を青年に教えたから。説得することは知性ではなく、心情に働きかけ、他者の決意を促すことである。ほかの学問は真理自体を求める。修辞学は大衆に対する思想的・情緒的影響を重視する。修辞学を駆使してできるのは、弁ずる者が聴衆の利益を願っていると確信させることである。〈修辞学は〉とルイ・ルグランの古い卒業生、フルーリは語る。〈詭弁を論駁し、真理を埋没から救う。それは公益に役立つ。〉また、ジョヴァンシも結論的に言う。〈修辞学は他者の意志を支配する技術である。〉[中略]

コレージュ・ド・クレルモンとコレージュ・ド・クレルモンにおいて修辞学級は文学的修業の仕上げとなった。この学級を終了すると、多くがコレージュから巣立った。彼らの理解では生活がたえずに変化し、人間や事物に関する教え、哲学の講義ほど思弁的でない教えを早々と得られるからである。」

(34) (*Del*, tome I, pp.218-219.)

Se, pp.5-6.

(35) *Hel*, pp.633-634. *HoL*, tome VI, pp.184-187. *Hem*, pp.554-555.

(36) *Hel*, pp.634-636. *HoL*, tome VI, pp.187-189. *Hem*, pp.555-556.

(37) *Hhl*, tome I, pp.10-12, 15-16, 120-121. HoL, tome VII, pp.10-13, 17-18, 120-122.
Hhm, tome I, p.49-52, 118-119.
エキニメ　一八一一一頁。